

き方だとはいえないが、少なくとも Anse には人間が “survive” するための〈性〉と〈生〉の力はある。

Addie の遺言から始まった旅において、Bundren 家の人びとの相互の関係を探り、作者フォークナーが描いたものが、人間の様々な生き方、肯定と否定を複雑にはらんだ生の様相であることをみてきた。埋葬の帰りの荷馬車では Dewey Dell と Vardaman が各各の希望を達成できなかった代わりにバナナを食べながら、足を折った Cash と Anse が連れてくる後妻を待っている。Bundren 家の旅の始まりである。Dewey Darl はおろせなかった子供を生み、Cash は足を引きずりながらも世間の考え方に範を求めて、絶えず balance に気を配りながら生きていくであろう。Anse は相変らず、他者に援助を求めつつ、ずぶとく、したたかに生きて行くのであろう。生を得た地上に生きた証を残そうとした Addie は忘却される。というより、忘却することが Bundren 家の生には必要だともいえる。貧農の生活の枠外に在る〈知〉の人物 Darl もまた忘却されてしまう。作者フォークナーの人間の見方には、肯定と否定が複雑に絡み合っている。フォークナーにとっては、Bundren 家の葬送の旅は、人間の忍耐力と行動の可能性を示す英雄的行為として捉えられているのではなく、人間の生への虚無的見解を示す旅と捉えられているのでもない。Bundren 家の人びとの生き方には、グロテスクさも、滑稽さも、真摯な態度も混じり合っており、それぞれの生き方が肯定と否定とを合わせ持っているのである。フォークナーは、このような生き方のいずれかを全面的に肯定することも、また全面的に否定することもなく、ただありのままに読者に提示するのである。様々な生き方の複雑な絡み合いを自然に描き出すことによって、より現実に近いリアルな人間の生の形を示すことに成功している。

態を見つめているようである。しかし、いやそういう彼だから、彼には代りの労働力を得る能力はある。彼には隣人たちの善意の労働の申し出をあてにするしたたかさがあり、またすでに Addie に夫として拒否されているのにも気付かずに、「お前もわしも子供を生むのはまだこれからだ。二人きりじゃないか。」(p.165) と言って更に子供を儲けようとする生殖能力がある。子供も彼の代りの労働力と考えられているのだ。埋葬の旅を義歯を入れるための、そして後妻を手に入れるための機会と考える Anse に対しては、Addie の復讐の意志など通じるわけがない。旅の終わりに入歯を入れ、後妻を連れてくる Anse には人を食ったようなところがある。

“It’s Cash and Jewel and Vardaman and Dewey Dell,” pa says, kind of hangdog and proud too, with his teeth and all, even if he wouldn’t look at us. “Meet Mrs Bundren,” he says. (p.250)

この旅の最後の Anse の姿を指して Slatoff は、最後の「Anse の勝利は空虚 (empty) である」と論ずるが、これは作品の表面を捉えた批評にすぎない。Brooks は、Anse は「一種の喜劇的人物」と述べて続ける。

But we must not underestimate him. He is not contemptible, a mere insect that one could and would like to squash underneath the foot. He represents a force probably necessary to the survival of the human animal though it is terrifying when seen in such simple purity³²⁾.

Slatoff に比べて Brooks の読みは深い。しかし、Brooks の言う「人間という動物の生存に必要と思われる力」とは一体何であろうか。筆者には、これは人間の生と死の事実に対する動物的な反応の仕方であると思われる。死を目撃すればすぐに自己の将来の生を考えると人間のもつ動物的本能である。Addie 埋葬後すぐに「アヒルのような格好の女」(p.249) を妻にしてしまう Anse は、最底辺部の生活を営む南部貧農の直観的な生への反応を示している。Addie との結婚で子供という重要な労働力を儲けたように、今度は Addie が死ねばすぐに Addie に代る労働力として後妻を手に入れ、Darl に代わる子供を儲けるのであろう。Bundren 家の生計を維持し、家族を生きのびさせるためには、そして、これがより重要なことだが、自分が生きのびるためには、後妻は欠かせないのである。もちろんこういう生き方が人間として<威厳> (dignity) のある生

32) *Ibid.*, p.155.

The twice broken leg and the pain which he accepts without protest, as Addie had accepted the violence of his birth, pave the way for the extension of his range of awareness and for his increased sensitivity both to events and to people. The process is accelerated by the fact that his traditional mode of response, constructive action, is suddenly denied him. Lying helplessly on the coffin, his leg encased in cement and jarred by every turn of the wheel, he is forced to seek new forms of expression³⁰⁾.

二度にわたって脚を折ったことで、彼の綿密な行動に支障をきたした Cash は、想像力を広げていくと Vickery は論ずるのだが、Cash は二度も脚を折ったことで将来は優秀な大工仕事も果せなくなるのである。そして Cash 自身が認めているように、Anse の後妻が携えてくる蓄音器から流れる美しい旋律に気を取られて、音楽を「聞いてばかりいて仕事がまるで手につかなくなってしまうだろう。」(p.248) Brooks は、「一種の平板な戯画³¹⁾」的人物として Cash は描き始められ、次第に感覚の領域を広げて round character に成長すると論ずるが、作品をよく読むと Cash は埋葬旅行が始まる何年も前から相当の感受性、想像力を持っていたことが判るのである。やはり Cash は眼前のことにのみ気を取られ、世間という判断の基準に絶えず頼る人物として生きていくと思われるのだ。彼には Darl のように共同体の枠を越えて物事を見ることは永久に不可能であろう。妻の埋葬後すぐに後妻を連れてくる Anse にも何の反応も示さずにいるのだから。とはいえ、Darl と Addie を欠いた Bundren 家を最底辺部の生活であれ中心となり率いていくのは Cash であろう。

「二十二の時、日向で働いて一度病気になって以来、汗をかいたら死にまうと皆に言いふらしている」(p.17) Anse は、苛酷な労働を強いられる南部貧農の生活を、他人の援助を期待しながら何んとか食いつないでいる。労働を嫌い、それでも家長として家族の者たちに命令を下す Anse のために、Addie を始めとして家族の者がいかに苦しい生活を強いられたか想像を絶する。Addie が死の床についても、ぎりぎりまで医者と呼ばないのは医療費を惜しむからであり、医者 Peabody に「ついに Anse が医者を呼ぶ気になったとすれば、もはや手遅れだ」(p.41) とまで言わせる。こういう言葉だけを弄する Anse に対する Addie の復讐（葬送の旅）は、Anse にはまるで影響がなかったようだ。洪水や火事に際しても、彼はただ呆然と状況を見つめるだけで何んら行動はしない。まるで「食用牛が背の高い老鳥のように背を丸め、悲しげに」(p.154) 事

30) Olga Vickery, *op. cit.*, p.239.

31) Cleanth Brooks, *op. cit.*, p.163.

くの批評家は Cash が行動と言葉を融合させ、想像力を広げ、人間的成長を示す箇所であると論ずる。まず、正気と狂気に関する Cash の考えをみてみよう。

Sometimes I aint so sho who's got ere a right to say when a man is crazy and when he aint. Sometimes I think it aint none of us pure crazy and aint none of us pure sane until the balance of us talks him that-a-way. It's like it aint so much what a fellow does, but it's the majority of folks is looking at him when he does it. (p.223)

Cash は、人の正気か狂気かを決定する権利は自分にはなく、世間の多くの人がどう見るかで決まると言う。判断の基準を公の世間に求めるのだが、世間一般の考えが間違っている場合もあるのだ。世間（共同体）が圧倒的な力を振って個人を狂気に仕立て上げることも多いのである。

Because Jewel is too hard on him. Of course it was Jewel's horse was traded to get her that nigh to town, and in a sense it was the value of his horse Darl tried to burn up. But I thought more than once before we crossed the river and after, how it would be God's blessing if He did take her outen our hands and get shut of her in some clean way, and it seemed to me that when Jewel worked so to get her outen the river, he was going against God in a way, and then when Darl seen that it looked like one of us would have to do something, I can almost believe he done right in a way. But I dont reckon nothing excuses setting fire to a man's barn and endangering his stock and destroying his property. That's how I reckon a man is crazy. That's how he cant see eye to eye with other folks. *And I reckon they aint nothing else to do with him but what the most folks says is right.* (p.223) [イタリック体は筆者]

Cash 自身も Darl と同様に、納屋では棺が焼けるままに放置し、洪水では棺が流れるままにしておくことが神の意に沿うと考えたこともあった。Cash にも腐臭を放ちながら葬送の旅を続けることへの疑問があったのである。しかし、他人の財産である納屋を焼いたのだから、世間一般（共同体）の人々が言うように Darl は狂気だと結論し、彼を Jackson の精神病院に送ろうと考える。Cash は自分自身の考えを通すことなく、世間の判断に最終的決定を委ねる、そして、「この世の中はやつ (Darl) には合わない。この人生はやつには向かない。」(p.250) と言う。

Vickery は Cash の人間的成長を認めて次のように論ずる。

批評家によっては、これが Darl の後の発狂の始まりを告げると読む者もいるが、前後の彼の落ちついた行動と冷静な判断力からみて狂気と断定することはできない。彼の狂気と正気の問題は、作品の最後まで明確に断定する証拠はないといえるだろう。Darl は Gillespie の納屋に火を放つが、これは隣人たちの死者を敬う最良の方法はできるだけ早急に埋葬してやることという考え方と同じで、彼はこの滑稽な旅に終止符を打つために Addie を火葬 (cremate) しようとしているのである。故に Darl の行為には合理性があるのであり、Darl の放火を単純に狂気と片付けるわけにはいかない。放火の行為の直後に、Darl は Jewel の引き起こした喧嘩をうまく仲裁して、Jewel の死による旅の中止という災難から家族を救っているのだから。家族の他の者に彼のような気転の利く者は一人もいない。しかし、結局は彼は狂気として片付けられて Jackson の精神病院に送られ、Bundren 家から永久に排除される。この精神病院送りも、客観的な第三者の判断に拠るものではなく、Bundren 家の者たちの個人的利益追求の結果、Darl を狂気にした方が得であるために決められたものである。Dewey Dell は妊娠を知られているために Darl を排除する方がよく、Anse は Gillespie の納屋の火事に関して、Darl を狂人にしてしまえば、弁償の責任を逃れられるのである。狂気と正気についての Cash の考え方は、問題が大きいので後でふれることにする。ともかく、Darl のように Bundren 家に欠けている〈知〉と〈判断力〉と〈想像力〉を持った青年が追放される点に、Darl 排除後の Bundren 家に、知的上昇の可能性が永久に閉ざれることを読者は予想できる。

〈言葉の人間〉 Darl と Anse と〈行為の人間〉 Jewel の中間に位置するのが優秀な大工の長男 Cash である。彼は母親 Addie が言葉不要の血縁関係を成立させた子供であり、また Addie の精神状態が最も平静な時に生まれた子供でもある。誕生の状況を反映するように、彼は作品冒頭では Addie の遺言を遂行すべく母親の棺桶作りに励み、それ以外のことには全く関心がない。家族の他の者の眼には、母親の死ぬ前に棺桶を作る Cash は母親を冒瀆していると映る。棺桶作りが終れば、彼は荷馬車の「均衡」(balance) (p.90) が保たれているかどうかにかつての注意を集中し、ほとんど言葉を発することもない。彼は〈行為〉の人間として登場し、眼前にある一つの問題にしか精神を集中できない想像力に欠けた青年として描かれる。棺が川に流される時には、Jewel と共に回収に努め足を骨折する。この骨折の箇所は、以前教会の梯から落ちて折ったのと同じ箇所である。父親 Anse は、教会で「折ったのと同じ足で幸運だった」(p.156) という。Cash は骨折の苦しみも示さず、棺が流された理由を一心に考えている。彼の一時に一事しか考えられない特長が表われている。

Darl が納屋に火を放った行為に対する Cash の考えが表明される場面を、多

知> (wisdom) には欠けているが、<知> (knowledge) の人物として最も鋭く Bundren 家の埋葬の旅の意味を、いや無意味さを把握している。読者が葬送の旅の意味、様々な事件の意味、諸人物の性格を知るのは専ら Darl の語りを通してである。もちろん、Darl には、母の愛を受けている Jewel への敵意、母 Addie の Bundren 家への影響を絶とうとする企み、があるために「独白」の歪みもあるが、直面する状況の把握力は他の誰よりも優れている。彼の思考は、具体的なものから抽象的なものへ急速に進み、無限に広がる。この特徴が、後の彼の行為を、世間に狂気と判断させることにもなる。このような彼の思考は、彼の自己存在への懐疑も生み出す。

...I dont know what I am. I dont know if I am or not. Jewel knows he is, because he does not know that he does not know whether he is or not. He cannot empty himself for sleep because he is not what he is and he is what he is not. Beyond the unlamped wall I can hear the rain shaping the wagon that is ours, the load that is no longer theirs that felled and sawed it nor yet theirs that bought it and which is not ours either, lie on our wagon though it does, since only the wind and rain shape it only to Jewel and me, that are not sleep. And since sleep is is-not and rain and wind are *was*, it is not. Yet the wagon is, because when the wagon is *was*, Addie Bundren will not be. And Jewel is, so Addie Bundren must be. And then I must be, or I could not empty myself for sleep in a strange room. And so if I am not emptied yet, I am *is*.

How often have I lain beneath rain on a strange roof, thinking of home. (p.76)

言葉と抽象的思考のなかで宙吊りになった Darl は、母親の世界から排除されたのであるから、何とかして彼の今住む世界の中で自己存在の位置を定めようとするのである。しかし、確固とした自己への信念を持たない彼は、孤児のように漂いながら真の「家庭」(home) を渴望するのだ。

旅の進行に従って Darl は、腐臭を放ちつつ何日間も棺を運び旅すること、そしてその旅に Addie に対する敬意の表明だけでなく、利己的関心が隠されていることを理解して、旅の無意味さ、グロテスクさを強く意識するようになり、笑い始める。

...but we hadn't no more than passed Tull's lane when Darl began to laugh. Setting back there on the plank seat with Cash, with his dead ma laying in her coffin at his feet, laughing. (p.99)

母親 Addie の犯した「罪の償いの象徴」²⁷⁾であり、彼女自身が自己の「救い」となると予言した三男 Jewel の描写には、作品冒頭から堅い木のイメージが付与されていて、彼の性格が柔軟性を欠いたものであることが判る。Addie の姦通という情熱的行為から生れた彼は直情的な烈しい行為を示し、その行為は全て棺の中の Addie に対する愛情から生れている。彼の「独白」が作品中ただ一つしかないのは、彼が〈言葉〉でなく〈行為〉の人物であることを示し、〈言葉〉の人物である Anse や Darl とは好対照をなしている。また、作品の冒頭で同じく〈行為〉の人物である Cash と比べた場合、Jewel の行為は烈しさと無鉄砲さを持っており、Cash の慎重で用意周到な、計算された行為とは大いに異なる。母親に対する烈しい愛情から、旅を早めようというあまり棺を川に流してしまったり (pp.140-142)、人を侮辱するような言葉を吐いて危うくナイフで刺し殺されそうになったりする (p.220)。しかし、川に流れる棺を必死で取り上げたり、Darl が火をつけた Gillespie の納屋から Addie の棺を守る行為は、Addie の「宝物」(jewel) としての彼の役割を充分果している。Jewel は、Cash の慎重さを欠き、知性的にも Darl にとても及ばないが、眼前の自分に課された仕事は無鉄砲ではあっても真剣に果していく。そして、それによって母親 Addie への激しい愛を貫く力を示している。もちろん、直情なために死に瀕するような結果を招く点は、Addie の持っていたあまりに激しい情熱に相通じるものであるが。ともかく、Jewel の存在と行動なしには母親の埋葬はあり得なかったことは確かである。

次に最も重要な三人の人物 Darl, Cash, Anse について検討してみよう。Addie は Anse による Darl 懐妊が侮辱であると考えたため、Darl を彼女の愛情の「環」の中に入れなかった。この母の愛の欠如が Darl を専ら「意識の世界²⁸⁾」に浮遊する青年にする。彼の意識は無限に拡がり、他者の心中の秘かな想いまで鋭く見抜き、更に、彼は状況を叙情的に描き出す「詩人」²⁹⁾ 的才能を有する。Addie の死の現場に居合わせなくても Bundren 家の人人の死に対する反応を正確に描き出す千里眼 (clairvoyance) をもち、Jewel の出生の秘密を嗅ぎ取り、Dewey Dell の妊娠の事実も知っており、その他の Anse や Cash や Vardaman の行動のパターンや心の秘密を正確に捉えている。Darl は〈意識〉〈知〉〈想像力〉の青年であり、また彼が作品中最も多く「独白」を与えられていることは、彼が〈言葉〉の人物でもあることを示す。Darl は〈英

27) Peter Swiggart, *The Art of Faulkner's Novels* (Austin: University of Texas Press, 1962), pp.189-190.

28) Olga Vickery, *op. cit.*, p.240.

29) David Williams, *op. cit.*, p.116.

Dewey Dell を生んでやったと言うとき、Addie は Dewey Dell にも全く同じような人間味のない情感のない態度を示したのである」²³⁾と説明する。従って Dewey Dell は精神面の全く欠けた Dewey Dell (Dewey Valley) という名前通りの肉体的面だけが肥大した女性として提示されている。彼女は、しばしば農場の鈍重な牛のイメージで表現され、動物的な欲望以外には何の情感も表わせない。Addie の生き方の精神面が捨てられた〈性〉と〈肉体〉の女性となっている。彼女の現在の意識には、青年 Lefe との sex の結果身体に宿った子供をいかにしておろすかということしかない。だから彼女はその子供をおろすことができると思われる Jefferson の町への旅をなるべく早く進行させることにのみとらわれている。しかし一方では、彼女を表わす表現として「熱く盲目の土地に宿る濡れた野生の種子」(p.61) や「世界を動かす梃子」(p.97) が使われている。精神面は全く欠いていながら、“earthmother”²⁴⁾として、女性の持つ生命を生み出す力があることを示す表現である。Addie 埋葬後の彼女は、町で墮胎に失敗して、新しい生命を生み出すより他に取る道はないのである。

四男 Vardaman は、まだ幼児であるために母親の死の現実を頭の中で整理できずに、クリークで捕えた魚の死と母の死を混同する。魚 (fish) には、文学的には「円環的再生を告げるもの」²⁵⁾という象徴的意味があるが、ここでは死と分裂崩壊の象徴として使われている。その魚である母親が棺の中で呼吸できないことを心配して、棺に無数の穴をあけ母親の死体に錐で傷をつけてしまう場面はグロテスクな悲喜劇となっている。そして、他の人々と同じく Vardaman も、幼児であるのに、というより幼児であるために Jefferson の町で見ることのできるクリスマスに陳列される玩具の「汽車」(p.63) に希望をかけている。彼には Vickery の言うように「具体的なものから、一般的抽象的なものへ移る」²⁶⁾ことのできない感覚的制限はあるが、白痴ではなく、時には幼児にしかできない鋭い詩的感受性も示している。

She (Addie) was under the apple tree and Darl and I go across the moon and the cat jumps down and runs and we can hear her inside the wood. (p.204)

23) Olga Vickery, *op. cit.*, p.243.

24) David Williams, *Faulkner's Women* (Montreal and London: McGill-Queen's University Press, 1977), p.110.

25) J. E. Cirlot, *A Dictionary of Symbols* (London: Routledge & Kegan Paul, 1962), p.107.

26) Olga Vickery, *op. cit.*, p.244.

た埋葬の旅の後で、彼女の遺体が土（自然）の中に深く埋もれる時に絶たれることになるのだ。

2. Bundren 家の人人の生き方

Addie が遺言として残した Jefferson までの葬送の旅に参加する Bundren 家の人人の態度には、彼女の生前の子供たちとの関わり方が色濃く表われている。フレンチマンズ・ベンド (Frenchman's Bend) の Bundren 家は小さな農村にあるのだが、40マイル離れた町へ出かけることはめったにない機会であるために、家族の者一人一人が町で可能な個人的楽しみに秘かに希望をかけている。埋葬の旅は死者に対する敬意を当然伴うべきものであるのに、その裏に個人的企みが潜んでいるということは死者に対する不敬であるとも取れるのだが、これはまたほとんど町へ出る機会もない田舎者たちの自然な態度でもあり、農業でかろうじて生きている人びとにとってまたとない息抜きでもあることを忘れてはならない。ぎりぎりの形で生きている南部貧農にとって、生きるために自然に備なわった生きる技ともいえるものである。もちろん、隣人たちのなかには Samson のように彼らの行為を批判的に見るものもある。

Because I got just as much respect for the dead as ere a man, but you've got to respect the dead themselves, and a woman that's been dead in a box four days, the best way to respect her is to get her into the ground as quick as you can. But they would't do it. (p.110)

Samson によれば、「箱の中で死んで4日も経つ女を敬う最善の道は、できるだけ早く土に埋めてやること」になる。しかし一方で、Bundren 家の人びとが Addie の遺言に従って旅をしていることを知ると援助の手を差し伸べる人たちもいることを考えると、南部貧農たちの間にぎりぎりの生活を送っている者同士の相互扶助の態度があることも見逃してはならない。家長 Anse が、死んだ妻に対する敬意が家族の者たちには足りないと言いながら、彼自身は町に行って入れ歯を入れようと秘かに考えていることを道徳的に批判することはもちろん可能だが、南部貧農の飲まず食わずの生活からは、死者への敬意と同時に、生きるということがいかに重要であるかということも考慮しておかなければならないだろう。

まず、長女 Dewey Dell と四男 Vardaman という Addie が「家を掃除する」ために生んだ子供について考えてみよう。Vickery は Dewey Dell は Addie の葬送の旅と最も関係が薄いと述べて、「Jewel を帳消しにするために Anse に

man to replace the child I had robbed him of. And now he has three children that are his not mine. And then I could get ready to die.
(p.168)

Jewel と帳消しになるように長女 Dewey Dell を Anse に与え、彼女が奪った子供の代りとして四男 Vardaman を Anse に与えたのである。その結果 Anse には彼の子であって、彼女の子ではない三人の子供がいることになる。三人の子供とは Darl と Dewey Dell と Vardaman であり、Addie の子供は Cash と Jewel だけということになる。

Addie は言葉と行為の一致を求め、充実した生によって言葉不要の彼女の世界を作り出そうと試みた。しかし、言葉を通して生徒と意志伝達を行う教師として充足感を持たず、結婚後は、怠惰で空語のみを振りまわす夫 Anse との生活で農業の重労働に耐え、一人で家庭を支えたのであった。更には子供たちの誕生により、労働と子供の養育に身をすり減らし、夫 Anse からは何の助けも求められなかった彼女の生活は不幸で苛酷なものであった。その不幸な生活の中での彼女の苦闘は Brooks の次の言葉に言い尽されている。

What she has done is to transpose the spiritual (and, specifically, the Christian spiritual) into secular terms. Man must not simply vegetate—must not merely grow up like a plant and in due course flower, yield his fruit, and subside again into the nurturing soil. Addie believes that man must assert himself through some unique gesture to indicate that he has lived²²⁾.

人間の生は単に生きて死ぬだけの植物的生ではなく、この世の中に生きた証を残す行為によって自己を主張する生でなければならない。Addie の信念もこういう人間らしい生の跡を地上に残そうとするものであった。言葉と行為の一致を求め、言葉不要の世界を創造しようとするのは人間の望みうる理想の生き方であるが、このような緊張した生を求めた Addie が Anse の空語を弄する態度に失望し、牧師 Whitfield との姦通によって生の可能性を探ろうとした行為は、その結果として生れた子供たちの間に激しい反目・対立・嫉妬を生み出したのである。更に、彼女の理想である言葉と行為の一致した生き方が、彼女をほかならぬ「死」へと導いたというところに彼女の人間としての限界があったといえるだろう。そして彼女の Bundren 家への影響は、怠惰な夫 Anse に課し

22) Cleanth Brooks, *op. cit.*, p.153.

「Anse でないもの」(p.166) を Anse に求めようとしなかったのである。言葉の空しさを知り、Anse との生に充足感を持ってない Addie は、次には「罪」(sin) を実際に犯すことによって単なる言葉である「罪」を試そうとする。「罪」とは牧師 Whitfield との姦通の「罪」であるが、相手が牧師という「神の定めた道具」であるために罪はそれだけ一層強烈なものとなる。

...the sin the more utter and terrible since he was the instrument ordained by God who created the sin, to sanctify that sin He had created. While I waited for him in the woods, waiting for him before he saw me, I would think of him as dressed in sin. (p.166)

隣人 Cola Tull にとっては罪や愛や救済は単に言葉の問題にすぎず、彼女は神の力にすぎることによって人間は救われるのだと信じて疑わないのだが、Addie にとっては空語にすぎぬ言葉には信頼性がなく、絶えず行為で裏打ちされた言葉のみが信じられるものである。Volpe はこの Addie の姦通の罪について述べている。

With Whitfield she knows the violation of her aloneness through sex that Anse failed to provide. Her experience achieves the intensity it does because Whitfield is a minister of God who talks about God's love and God's sin²¹⁾.

Volpe の言うように、Addie は Anse が与えることのできなかつた〈性〉によって孤独の殻の破壊を狙ったのだといえるだろう。そして Addie はこの姦通によって生れてくる三男 Jewel を次のように言う。

“He is my cross and he will be my salvation. He will save me from the water and from the fire. Even though I have laid down my life, he will save me.” (p.160)

彼女の死後も彼女を救ってくれる Jewel を彼女の「救い」(salvation) と考えて希望を託するのである。姦通の結果の子供 Jewel と共にいると Addie の激しい生の焦燥感も鎮まり、「狂おしい血は蒸発して、その音も止んだ」(p.168) のである。そこで彼女は、彼女の生に決着をつけるべく「家を掃除する」(p.168) 準備を始める。Addie は語る。

I gave Anse Dewey Dell to negative Jewel. Then I gave him Varda-

21) Edmond Volpe, *op. cit.*, p.135.

〈行為〉によって自己の生の充足を求めようとした Addie に、その結果生れてくる子供という〈生物〉に対する義務が生じる、それは恐ろしいまでの生きた者への義務であるということである。また同時に、Cash との血の繋りによる言葉不要の肉親関係は、これまでの彼女の言葉に対する不信感を一層強める結果にもなった。言葉は「言おうとしていることにすらぴったり当てはまった試しがない」のであり、「母性」(motherhood) という言葉もそれが必要なものが作り出したにすぎず、子供を持った親にはそれを表わす言葉があろうとなかろうとどうでもよいのである。そして、彼女の「孤独」(aloneness) も Anse との sex によっては破られることはなく、Cash 誕生という生物学的親子関係、血の関係によってのみ破られたのである。これは〈性〉という彼女の期待したものによっては孤独が破られないという彼女の現実認識を示している。

夫 Anse の使う「愛」(love) という言葉も、彼女には真実味のあるものとしては受け取れず、「愛」という言葉も「欠乏を埋める形態にすぎない」(p.164) と考え、Cash との血を分けた関係にのみ真実をみる。Cash によって破られた「孤独」は破られることによって再び完全な「環」(circle) を作り、彼女の不信を抱く「時間」と「Anse」と「愛」をそこから排除する。Addie は内向し、Cash との言葉不要の血の関係を内に含む「孤独」(aloneness) を守ることになる。

次に、次男 Darl を身籠った時に、彼女には「愛」不在の妊娠は Anse による欺し打ちと感じられて、Anse を精神的に「殺し」(p.164) 排除してしまう。

But then I realised that I had been tricked by words older than Anse or love, and that the same word had tricked Anse too, and that my revenge would be that he would never know I was taking revenge.
(p.164)

しかし、彼女は同時に、彼女を欺いたものは「Anse や愛より古い言葉」であり、その言葉は他ならぬ Anse をも欺いていたと悟る。「Anse や愛より古い言葉」とは〈性〉という無時間的、無意識的自然の力を示し、「愛」を越えて働く〈性〉の力であろう。そこで彼女は Anse が気付かぬように復讐することを誓う。Darl が生まれた時に、Bundren 家の New Hope の墓地ではなく彼女の一族代々の墓地のある Jefferson に埋葬することを Anse に約束させる。40マイルも離れた Jefferson の墓地に埋葬を約束させるということは、愚鈍な Anse には判らないのだが、明らかに Bundren 家の拒否を示している。またこの約束は、言葉の存在である Anse に対して行動を伴わせようとする復讐でもある。しかし、裏切り者である Anse から彼女が離れていかないのは、Anse との結婚に彼女が何らかの生の形を残そうと考えていたからであり、それで彼女は

教師という職業についており、言葉によって人を教える立場にありながら子供達が“secret and selfish thought”¹⁹⁾を抱き、各各の殻に籠っているために真の心の交流が不可能なことに悩み、生徒たちには彼女自身の“blood”とは無縁の“blood”が流れていると痛感する。そしてこの言葉による交流の不可能さと孤独を実感する時、彼女は心を鎮めてくれる「泉」(spring)に行く。「泉」と「土」(earth)は<自然>であり、言葉による伝達を基礎とする<社会>と対立する人間の無意識的な<自然>を表わすものである。<意識>の女性である Addie を癒すのは<無意識>になれる<自然>の中であるといえる。それでも彼女が<社会>という<意識>の中に住む限りは、言葉が「地面にしがみついて、こわごわ地面をはって行く」(p.165) 行為である充実した人生を生きなければならない。これが彼女の父親が生前言っていた「生きることの意味は長い間死んでいる準備をすることにある」(p.126) である。言葉に依存する職業につきながら、言葉の限界を知った彼女は、生徒たちを鞭打つことで交流感を持つと試みるサディステックな行為で子供たちの“secret and selfish life” (p.162) のなかに入ろうと試みるのだ。このような Addie の結婚前の激しい生の焦燥感はまだ彼女が全く身寄りのない孤独な女性であったために更に激しさを増したのだといえる。

彼女の Anse との結婚は「北に行く雁の鳴声が荒涼とした暗闇から高くかすかに狂おしく聞こえてきて、耐えがたい思いを誘うとき」(p.162) であった。本能的に渡っていく雁の姿は無意識的な本能的な自然な生を生きられない Addie にとってはまさにあこがれであった。結婚による本能的な結合を求めた Addie には、夫 Anse の人格など問題ではなかった。それ故に“*And so I took Anse.*” (p.162) という言葉は、Slatoff が論ずるように、「彼女の孤独に終止符を打つために、結合と関係へのあこがれを満たすために Anse を選んだ」²⁰⁾ことを示すといえるだろう。そして、長男 Cash 懐妊の時の Addie の言葉は次のようになる。

And when I knew that I had Cash, I knew that *living was terrible* and that this was the answer to it. That was when I learned that words are no good; that words dont ever fit even what they are trying to say at. (p.163) [イタリック体は筆者]

Cash 懐胎によって「生きることは恐いことだ」と悟ったとは、<性>と

19) William Faulkner, *As I Lay Dying* (New York: Random House, 1930), p. 161. 以後この作品からの引用は全てこの版に拠り、ページ数のみをカッコの中に示しておく。

20) Walter Slatoff, *op. cit.*, p.161.

つまり母親 Addie の死が、「障害物マラソン」のように様々な問題を残された家族の者たちに投げかける。そして、その死から一つの生が形作られる。作者は旅の後に生き残る者たちを通して「喜劇的調子」で「意地の悪い人間賛歌」をしているというのである。Howe は葬送の旅の様様な試練とは裏腹に、生き残る人びとが喜劇的ながら一つの重要な生を形作っていると論ずるのである。この読み方は、作者フォークナーがこの作品に対する態度、突き放した客観的態度をよく捉えている。

筆者としては、フォークナーがここで埋葬旅行を通して描こうとしたものを考える時、C. Brooks のように Bundren 家の英雄的行為と忍耐力と可能性を余りに強調することも、また E. Volpe のように作品の虚無性・不条理性を強調しすぎることも危険であると考えられる。作者は葬送の旅によって、家族間の心理的絡みを示し、人間の生き方の多様性を時には極端なデフォルメを加えながら読者に示したものである。人間の生き方というものは、その人自身は真剣に考えて正直に生きているつもりでも、絶えず限界をはらんでいるものである。そのために作者は、人物同士をお互いを照らし出す鏡として使って、複雑な人生模様を描きだしているのだ。そこで、この作品に描き出された様様な生の形を捉えていくには、読者は母親 Addie の生き方が他の家族の者たちにどう影響を与え、その人びとの現在の生の形をどのように作り出しているのかを細かく辿ることから始めねばならない。

1. Addie の 生 き 方

作品冒頭で、「死の床」について長男 Cash の棺桶作りをみつめている Addie は、死後の彼女の埋葬旅行の途中で初めて「内的独白」の機会を与えられる。全部で59の「内的独白」の40番目である。死後に彼女の「語り」が与えられているということは、もちろん、彼女が他の家族の者たちに与えた影響が死後も継続中であることを示しており、この影響は彼女の遺体が Jefferson にある彼女の一家代々の墓地に埋葬され、土(自然)の中に埋められてしまうまで続くことになる。Vickery はこの Addie の影響について「彼女の子供たちの誕生の状況が彼らの Addie に対する意識と埋葬に対する反応と参加の型を確立する」¹⁸⁾と述べる。故に、母親 Addie の生前の生き方を辿ることが子供たちの現在の生き方と、その生き方の限界を知るために重要になる。

南部の貧乏白人 Bundren 家の家長 Anse と結婚する前の Addie は小学校の

18) Olga Vickery, *op. cit.*, p.237.

味で悪意さえあるために、いかなる肯定もこけおどしになる」と私たちに感じさせるといっているのである。そして、作品最後の父親 Anse の「勝利は空虚」¹³⁾であると結論する。確かに Anse のような怠惰きわまりない人物が最もうまく生き残る点に読者は人生の虚無を感じるかも知れない。しかし、よく考えてみれば、Anse のような男でも生き残るといふことにはそれなりの意味があるのではないのか？ いや現実には世の中で生きのびているのは、Darl のように鋭い認識力を持った人物ではなくて、社会の最底辺部で生き残る力を持った Anse のような人物ではないのか。一方の E. Volpe は「この短い小説は人間存在を不条理な冗談 (an absurd joke) として提示している」¹⁴⁾と読み、最後の Darl の発狂を

Mad, Darl can finally laugh at the macabre joke that is life, and at the greatest joke of all: man's capacity to bear anything¹⁵⁾.

と論ずる。Darl が笑っている対象は、まさに「人生である気味の悪い冗談」と「人間が何のものにも耐える能力」という最大の冗談であると述べる。Darl のように鋭い眼で人生をみようとする者には人生が全くの“joke”にみえるかも知れない。しかし、人生とは Darl のような知性のとぎすまされた眼では捉え切れない幅の広さを持っているのであり、Darlこそが人生を正しくみているとは言い難い。作者の共感は最も多くの「語り」を任せられた Darl により多く注がれていることは確かだが、しかし作者の眼は Darl をも越えていることを忘れてはならない。

最後に Irving Howe は、この作品の主題は「死一生を形づくる死」¹⁶⁾であると主張して続ける。

...the book stumbles from catastrophe to catastrophe, a marathon of troubles. Suspense is maintained by likelihood that still greater troubles are to come, while the ability of some characters to survive with equanimity becomes both an assurance of the comic tone and a wry celebration of mankind¹⁷⁾.

13) *Loc. cit.*

14) Edmond Volpe, *A Reader's Guide to William Faulkner* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1964), p.126.

15) *Ibid.*, p.140.

16) Irving Howe, *William Faulkner* (Chicago and London: University of Chicago Press, 1951), p.176.

17) *Loc. cit.*

能性」⁵⁾を描くと読む。そして長男 Cash を喜劇の淵から “dignity”⁶⁾を達成する人物と考える。埋葬旅行の積極的な価値を認める読み方である。だが、旅の途中で様様な損失をこうむり、最後に無能な Anse がこの旅で最も得をするという作品の結末をみると、Brooks のいう「英雄的行為」や「忍耐と行為に対する人間の可能性」という言葉は適切とはいえないのではないか。

次に F. J. Hoffman は、この作品は “a family story”⁷⁾であり、家族の者をお互いに対立させて、そこから「一つの真理に対する幾つかの視点からの心理的研究」⁸⁾を行なっているのだと考える。そしてその真理とは「死ぬことではなくて、生まれそして生きる状況」⁹⁾であると述べる。Hoffman は母親の死の結果が残された家族に与えた心理的影響を、この作品の重要問題としている。確かに読者は作品を理解するために、慎重に人物の心理の動きを読み取る必要があるが、Hoffman には「生まれ生きる状況」についての詳しい説明が欠けている。心理的絡みを読み取り、そこから家族の者たちの各々が持つ人間的限界を推えて、なお「生きる状況」を正しく把握していかなければならないのである。この Hoffman の批評と類似しているのが Olga Vickery の批評で、彼女も家族間の心理の葛藤を中心に詳細な論を展開している¹⁰⁾。

次に作品のもつ虚無的雰囲気注目しているのが W. Slatoff と E. Volpe である。まず Slatoff は、この物語りは “a grim and horrible joke”¹¹⁾であると述べて続ける。

...we must feel simultaneously that Faulkner is making a kind of comic affirmation and that he is saying that life is so meaningless and even vicious that any kind of affirmation is a mockery¹²⁾.

フォークナーは「喜劇的肯定」をしようとすると同時に「人生はあまりに無意

5) *Ibid.*, p.165.

6) *Ibid.*, p.163.

7) F. J. Hoffman, *William Faulkner* (New Haven: College & University Press, 1966), p.60.

8) *Ibid.*, p.61.

9) *Loc. cit.*

10) Olga Vickery, “The Dimensions of Consciousness: *As I Lay Dying*,” in *Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. F. J. Hoffman and Olga Vickery (East Lansing: Michigan State University Press, 1960), pp.232-47.

11) Walter Slatoff, *Quest for Failure* (New York: Cornell University Press, 1960), p.172.

12) *Ibid.*, p.173.

をさらすことによって、単なる南部貧乏白人の生き方を示すにとどまらず、普遍的な人間の生き方の問題を極めて効果的に読者に提示しているのである。

この作品は Bundren 家の一家六名（家長の Anse, 長男 Cash, 次男 Darl, 長女 Dewey Dell, 三男 Jewel, 四男 Vardaman）が死んだばかりの母親 Addie の生前の遺言に従って、Jefferson にある彼女の一族代々の墓地に埋葬するため 40 マイルにおよぶ葬送の旅を行う様子を描いたものである。この旅が登場人物 15 人による 59 回の「内的独白」によって語られる。Bundren 家の者 7 人 43 回と、Bundren 家以外の者 8 人 16 回である。Bundren 家の外部の者の視点を 16 回導入することによって、作者はこの一家の行為を見る外部の共同体の意識、批判的眼を効果的に使っているといえる。このような「内的独白」の技巧は語り手の内面の複雑な心の動きや、他者に対する細かい心の動きを読者に知らせてくれる。しかし、一方で、作者の意見が全く認められず、作品の背後に完全に退いてしまっているために、読者は一見したところ jigsaw puzzle でも見ているような印象を受ける。各各の「独白」は語り手の心のなかにある他の人物に対する敵意と嫉妬と共感をおり混ぜており、非常に主観的な語り手の心の告白となっているために、読者は各各の「独白」を注意深く読み取り、「独白」のどこまでが客観的事実を語っており、どこまでが歪曲された主観的事実であるかを的確に捉えなければならない。時には Bundren 家以外の者の視点も利用しないとほめ絵は完成できないし、この埋葬旅行のもつ意義も充分理解できないのである。「独白」の一つ一つを読み進むに従って、読者の頭の中に次第に Bundren 家の家族の者との敬意と共感が浮かび上るように仕組まれている。まさに jigsaw puzzle で、一つのはめ絵から推して次のはめ絵を合わせる作業を積み重ねて全体像が浮かび上るのに似ている。読者は各各の語りが極めて個人的なものであることを念頭において、どれか一つの語りに全信的頼を置いたりすることは避けねばならない。

このように読者自らが作品の全体像を構成していく作業は、難しさと共に面白さも同時に備えている。この全体像構成の作業が済めば、今度は作品の主題が何であるかを考えねばならない。そこで、主な批評家の、この作品の主題についての意見をここで概観しておこう。まず Cleanth Brooks の読み方であるが、彼は洪水や火事から Addie の棺を救おうとする Cash や Jewel の必死の行為も、災難に遭遇しても何の役にも立たない Anse の愚昧さも人間の生の両面を表わすと考えたうえで、ともかく災難を乗り越えていく埋葬旅行の型を重視して、これを「英雄的行為」⁴⁾とみなし、この作品は「忍耐と行為に対する人間の可

4) Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven and London: Yale University Press, 1963), p.143.

ウィリアム・フォークナー：

『死の床に横たわりて』論

—否定からの旅立ち—

馬 場 弘 利

序

『死の床に横たわりて』(1930) (*As I Lay Dying*) は前作の『響きと怒り』(1929) (*The Sound and the Fury*) と同様に、技法的には「内的独白」(interior monologue) の手法を用い、作品の素材としてはアメリカ南部の一家族を使っている。両作品には、このような類似点と共に相違点もある。『響きと怒り』においては四章のうち最後の Dilsey の章だけが三人称で作者の視点から語られているが、『死の床』の方は登場人物のみの語りで成り立っており、作者フォークナーの姿は全く作品の表面には現われないのである。このために「内的独白」を技法とする作品としては、『死の床』の方が完成度が高く、まさに *tour de force* (離れ技) といえるだろう。フォークナー自身がこの作品を「一語も書き変えずに」¹⁾、そして「十二時間労働の仕事の合間を利用して、約六週間で書き上げた」²⁾と言明していることはまさに彼の天才的創作能力を示している。一方の素材の点では、前者の南部貧乏白人の一家と、後者の南部の名門 Compson 家では根本的に異っている。作者は Compson 家に対しては主観的な態度で接したが、『死の床』の貧農 Bundren 家に対しては突き放したような客観的態度を一貫して保っている。フォークナーはこの作品の創作に関して次のように述べている。

I simply imagined a group of people and subjected them to the simple universal catastrophes which are flood and fire....³⁾

作者は「洪水と火事という単純な普遍的な自然の災難」に Bundren 家の人人

1) Frederick L. Gwyn and Joseph Blotner (eds.), *Faulkner in the University* (University Press of Virginia, 1959), p.87.

2) James Meriwether and Michael Millgate (eds.), *Lion in the Garden* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1968), p.244.

3) *Loc. cit.*